いつかの七夕

志菜

　七、八歳の少女が、白い手を硯に添えて、無心に墨を磨っている。涼やかな目の、美しい少女だ。右頬と左頬にそれぞれ、向かい合うような小さなほくろがある。
　文机のすぐ傍では、短冊を手にした父親が、穏やかな笑みを浮かべながらその様子を見守っていた。
「おみおは、ほんに別嬪さんやなぁ。今の取引がうまくいったら、着物でも簪でも何でも好きなもん買うたるさかいな」
　少女は手を止めて父親を見た。思い詰めるような、真剣な表情だ。
「死んだお母ちゃんの薬代で、うちの家、しんどいんやろ？　うち、なんもいらん。お父ちゃんが元気でおってくれたらそれでええ」
　父親は虚をつかれたように一瞬言葉に詰まったが、すぐに大きな声で笑った。
「子供がそんな事心配せんでもええ。お上の政策が変わったら、暮らし向きもまた変わる。お前のことはお父ちゃんが守ったるさかいに、先生の言う事聞いて手習い頑張っとったらええ。ほら、余所見してるさかい、墨が頬についたで」
　少女は、父親を睨んだ。しかし唇は、笑いをこらえるように噛み締められている。
「意地悪言わんといて。これはほくろ、や」
　そう言って安心したように再び、硯に向き直る。
　開け放された障子の外には、笹の葉が小さく揺れていた――。

「目を離したらすぐこれや。ちょっとお前さんたち、さぼってたらいつまで経っても終わりまへんがな」
　長屋の女房たちの威勢のよい声に、井戸の脇で一服していたもろ肌の男たちは、しぶしぶ立ち上がった。
「ちょっと休憩してただけやろが」
「もう、どこも終わってて、まだなんはうち所だけや」
　今日はどこの長屋も、店子総出で井戸攫えをするのが決まりである。
「分かっとるがな、いちいち大きな声出さんでええ」
　大工の親方が女房に怒鳴り返したとき、井戸の中から手ぬぐいで頬かむりをした若い男が顔を出した。
「底の泥掻き終わりましたで」
「おお、すまんな竹吉」
　褌姿の若者は滑車に手を掛けて井戸の外へ降り立つ。
「あんたら、竹吉一人に働かせとったんか」
　別の女房の叱り声に、そばにいた亭主は地面に掻き出された泥を、足で均しながら言い返す。
「ちゃうがな。井戸の中へは一人しか下りられへんから、待っとんったんやがな」
　幼い子供たちの手を引いた水売りの若い女房が、笑みを含んだ声で言った。

「竹やんは、はよう終わらせたくてしょうがないんやろ？　新町で織姫はんが待っとるんやもんなぁ」
　竹吉は照れたように笑いながらそれには答えず、小脇に抱えた桶を子供たちに差し出した。
「井戸の底にこんなんおったで」
　桶の中には、誰かが落としたのか数枚の銭の他に、小指ほどの大きさの、黒いイモリの姿も見える。覗き込んだ子供たちが、歓声を上げた。
　その横で、大工の女房が男たちを急き立てる。
「掃除が終わったんやったら、水を入れ替えて。もう、素麺も瓜も冷えてるさかい、はよ食べよ」
「お供えする酒も忘れてへんやろな」
「回りくどい聞き方せんでも、お前さんたちが呑むお酒もちゃんと用意してあります」
　先ほどより明らかに動きが速くなった男たちの傍で、子供たちが桶の中のイモリを覗き込んでいる。
　竹吉はその様子を微笑ましげに眺めながら、頬かむりを取った。
　蝉が飛んできて、井戸の屋根に止まって鳴き始める。
　声につられて上を見上げると、真っ青な空が広がっていた。今日も暑くなりそうだ。
　竹吉は手ぬぐいで汗を拭きながら、今夜会えるであろう女のことを思った。天神である女の揚げ代は三十匁。日当が二匁がやっとの自分にとっては、分不相応な相手であることは分かっている。
　だからこそ、会える夜が待ち遠しい。会えないからますます会いたくなる。会えない夜の分だけ、思いはつのる。

　新町の廓で、一人の遊女が文机に頬杖を付いて、隣部屋に積み上げられた小袖を見ていた。まだ一度も袖を通したことのない着物を七枚、重ねて供えられている。一番上に載せられた、裾に薄墨色の笹模様が織り込まれた紗の着物は、馴染みの旦那が京で特別に拵えさせたものであるという。
「始末屋の多い堺のお人にしては、豪儀なことしはる」
　煙草盆を引き寄せながら、つぶやくと、襖が開いて禿が顔を覗かせた。
「姉様、お湯に行かはるんやったら、そろそろお仕度せんと」
「ふん、そうやなぁ」
　火種を探しながら気のない返事をする遊女の脇を通って、禿は柱に竹筒を吊り下げる。小さな竹筒の中には桔梗が生けられていた。
「太夫様から、浮船姉様にって」
　浮船は黙って竹筒に入った桔梗を見上げる。片膝をついた浴衣の裾から、白い脛があらわになった。
「珍しいこともあるこっちゃ」
　煙管を咥え、深々と吸い込む。

「かじは」
　目の前に正座して、同じように桔梗を見つめている禿の名を呼ぶ。
「イモリの黒焼きってどうやって作るか知ってるか。竹筒に入れて焼くねんで。焼き殺してまで、そこまで苦しめてまで叶えたい恋ってどんなんやろな」
　ため息のように紫煙を吐き出した浮船の頬には、小さなほくろがそれぞれ一つづつあった。

　――終――

いつかの七夕

http://p.booklog.jp/book/74143

著者：志菜
著者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/shina-jpn/profile

感想はこちらのコメントへ
http://p.booklog.jp/book/74143

ブクログ本棚へ入れる
http://booklog.jp/item/3/74143

電子書籍プラットフォーム：ブクログのパブー（http://p.booklog.jp/）
運営会社：株式会社ブクログ